

石堂まゆみ作 荒木寛二脚色「神の備えた道を」

<前編>

- 健一 あれ、まゆみちゃん、どこに行ったんだろう。まゆみちゃーん！ あ、大変だ！
まゆみちゃんがアドバルーンと一緒に空に昇ってる。だれか来て！
- まゆみ(ナレーション) そうなんです。わたしの名は横山まゆみ。あれはわたしが小学3年生の時でした。わたしのうちは衣料店をしていて、その宣伝に使うアドバルーンが、我が家の屋上に縛り付けてありました。おてんばのわたしがそれをほどいて、縄を持った途端、体が宙に浮かんでしまい、必死でぶら下がっているところをお友達に見つけられ、店の従業員のおじさんにやっと引き下ろしてもらったのです。わたしの兄弟は兄2人と姉1人でしたが、父も母も店の仕事に追われ、気にはかけていたようでしたが、なかなかわたしたちと過ごすことができませんでした。
- 母 まゆみ。今日は学校で何かあったかい？ このところ忙しくて勉強も見えあげられないで、気になっているのよ。
- まゆみ 別に。何もないよ。じゃお休みなさい。
- ナレーション 末っ子のわたしは、兄や姉とは年の差もあり、独りポツンと置き去りにされるような思いになることがしばしばでした。おまけに、中学2年生の時、突然父が亡くなり、一段と寂しさを感じるようになりました。それでも生まれながらのファイトで、勉強を頑張り、地域では名門の女子高、また大学へと進学しました。その間、母は一人で家も店も取り仕切っていて、忙しい毎日でした。そんな母を見ながら、手伝おうともしない兄や姉たちに、わたしはよく食ってかかりました。
- まゆみ お姉さん、今日も出かけるの？ たまにはお母さんの手伝いしたら？
- 姉 何よ！ そう言うあなただって、勝手にしてるでしょ。人のことを言わないでよ、妹のくせに。
- 兄 まゆみ、お前、顔を合わすたびに、どなり回しているが、おれはおれなんだ。
小姑こじゅうとのように、いちいち文句を言うな。
- ナレーション 母の忙しさに比例するように、兄弟の中がギクシャクすることが多くなってゆきました。母はひそかに心を痛めていたようで、以前から入っていたある新興宗教にますます熱心になり、わたしたちにもその教えについて話しましたが、わたしたちは逆に反発するばかりでした。今から思えば、本当の心の触れ合いがなかったのです。
- やがてわたしは大学を卒業し、外資系の写真の通信社で働き始めました。せめて家庭の外では必要とされる人間でありたいと、懸命に努力しました。知らず知らずに、家庭での顔と職場での顔を持つようになり、だんだん自分がよく分からなくなってきました。そんなある日、職場の同僚から、あることに誘われました。

同僚 横山さん。わたし、空手の道場に通り始めたの。女性はあまりいないし、知ってる人もいないので、少々心細いのよ。ね、あなたも空手やってみない？ 一緒にできるといいんだけどなあ。

まゆみ そうね。わたしも何かスポーツしたいと思っていたので、考えてみる。ご期待に添えるかどうか分からないけど。

ナレーション わたしはそう言いながらも、もしかしたら、これで心身ともに自分を鍛えられるかもしれないと、ひそかに思っていました。そして翌日、その同僚と一緒に加わることを伝え、すぐに道場に通り始めました。

道場の教師 横山さん。ほかのスポーツも同じでしょうが、一生懸命練習する人が勝ちですよ。仕事を持っている方は、何かと大変でしょうがね。何か分からないことがあったら、周りの者に聞いてください。せっかくだから、練習着もありますので、一汗かいてから帰ってください。じゃまた。

まゆみ (モノローグ)いきなり練習じゃ驚いちゃう。あの先生、キビしい…。

同僚 まあね。わたしも始めたばかりだからよく分からないけど、女性には結構気を遣ってくれてるみたいよ。じゃ今日のところはわたしとお手合わせを願いますよ。じゃ行くわよ。いっち、にい！

まゆみ どうやればいいの？ それ、「突き」というの？ 同じようにすればいいのね。

同僚 まあ、そういうことね。今日は雰囲気慣れることよ。男性郡に圧倒されないように、自分のペースで始めることね。

ナレーション このようにして始めた空手も、日を追ううちに、興味もわき、やがて、激しい練習に身も心も没頭するようになってゆきました。そのかいあって、流派内の大会にも出て、何度か入賞するようになり、何だか自分に自信が持てるような気がしてきました。

道場の教師 横山、実力もついてきたし、ここでひとつ頑張ってみるか。実は今年の夏、ドイツのデュッセルドルフで世界選手権大会が開かれることになったんだが、お前も出場選手に選ばうと思っているんだ。そのためには、練習が今までより厳しくなるが、どうだ？

まゆみ 先生、ぜひ出場させてください。わたし、練習も一生懸命ついていきますから。

ナレーション わたしは、入賞するたびに、人々の賞賛や誇りに心を満たされるものを感じるとともに、もっと大きな榮譽を受けたいとの思いも同時に心に広がってきました。だから今回の話は、絶好のチャンスだと心踊る思いでした。

同僚 ああ終わった。もうクタクタ。それにしても横山さん、あなたよくついていってるわね。わたしも大会に出たいから、つい「行きます」とは言ったけど、練習のキツイのにはお手上げ。さすが横山さんは違うわね。

まゆみ 何よ。あなたが先輩じゃない。わたしなんかまだまだよ。ただ根性でがむしゃらにやる以外に能がないんだから。あなたも弱音を吐かないで、やる！

同僚 やるのはいいんだけど、実はわたし、母親から言われちゃった。家のことを何もしないで、帰ってくるなり「ご飯、寝る」なんて女の子のすることかって。そう言われると立場ないよねえ。あなたのところはどう？

まゆみ うちとは別に何も言わないけど、心配してるみたい。我が家はそれぞれ勝手にやってるから、構わないのよ。

ナレーション わたしは、仕事の残業、週4日の道場通い、深夜の帰宅と、何かに取り付かれていますかのようなぎりぎりの生活を続けていました。デュッセルドルフでの大会が迫ってくるに従って、ますます熱心に練習に励む日が続きました。

道場の教師 横山、この辺で少しペースを落としたほうがいいぞ。大会も間近だし、体調をしっかり調整しておかないと実力が出せないからな。初めての世界大会出場だから、勝手がよく分からないだろうが、何かあったらすぐ相談してくれ。いいな。はい、お疲れ様でした。

まゆみモノローグ じゃ、今日はこれぐらいにしておくかな。でも急にペースを落とすとかえってよくないかも。よし、もう少し頑張ろう。

ナレーション その日も、家に帰ったのは深夜でした。いつもは寝ている母が、その夜は起きていて、わたしをじっと見るとこう言いました。

母 まゆみ、あなた少しむくんでない？ そう見えるけど。

まゆみ 何よ。むくむわけないでしょ。こんなに動いてるのに。むしろやせてきているのよ。

母 でもわたしには、そう見えるけど。毎日こんなに遅いのは体によくはないよ。気をつけないと。

まゆみ もう少しで大会だから、それまでは今のペースで頑張らなきゃならないのよ。今までの努力が無駄になっちゃうから。心配しなくても大丈夫よ、お母さん。わたしまだ若いんだから。

母 そう言っても、まゆみ、お父さんだってまだ若かったのに、急に亡くなったでしょう。あなたも気をつけてよ。

ナレーション 母の心配をよそに、わたしはひたすら大会に向かって突き進んでいました。そんなわたしに思いもよらないことが起こりました。大会も目前に迫った 8 月のある朝、いつものように起きようとしたのですが、全身に鉛のような疲れを覚え、どうしても起き上がれないのです。日ごとのたまった疲れが一度に出たのだらうと、その日は仕事を休むことにしました。ところが、一日休んでも疲れは取れず、同じような状態です。心配した母は、わたしを病院に連れていきました。

医師 横山さん。診断の結果を申しますが、あなたはバセドー氏病です。疲れがひどいのも、体がむくんでいるのも、そのせいです。回復まで何年かかるか今は申し上げられませんが、すぐ治療しましょう。

まゆみ バセドー氏病？ 先生、何とか大会には出られませんか？ 来週なんです。

医師 残念ですが、大会出場はどう頑張っても無理です。あきらめてください。ちゃんと

直せば、またのチャンスがあるかもしれませんから。

まゆみ

お母さん！ わたし、どうしたらいいの？ わたし、どうしたら…。(泣く)

ナレーション

今でも、あの時の心の衝撃は忘れることができません。ドイツ行きの夢はあえなく破れ、出勤することはできたものの、仕事にも打ち込めず、まるで心の中にポツカリと空洞ができたように、わたしはむなしい思いに打ちのめされていました。でもそれは、不思議な神様の導きだったのです。その時のわたしは、まだ神様のことも、信仰の世界も何一つ知りませんでしたが、神様のほうでは、この暗やみの中からわたしを救い出そうと計画しておられました。わたしの努力や期待とは全く別の方法で、わたしがその苦難から脱出する道を備えておられたのです。

<後編>

ナレーション

足元から崩れ去った大会入賞の夢。暗やみの中で、かすかにも見えない将来への希望。むなしさは日に日にわたしの心に広がっていきました。母や兄姉たちはそのようなわたしを、心配しながら見守っていました。結婚していた姉も、実はその時厳しい試練の中にあっただのですが、わたしは自分のことで精一杯でした。

姉

まゆみ。わたしもね、主人の仕事の失敗の時、初めてキリスト教の教会に行ったのよ。お母さんが信心していた宗教とは違う「本物」が、この教えにはあると思えた。そして通っている間に、本気でクリスチャンになりたいと思うようになって、6月にバプテスマ、洗礼を受けたのよ。そしたら、何か心の中の重荷がすごく軽くなった。「大丈夫、神様がついていてくださるんだ」って。あなたも今つらいだろうけど、このイエス様を信じるといいと思うよ。一度教会に来てみない？

ナレーション

わたしは、姉の属している教会の特別集會に誘われて、母とともに、初めて、真剣に求める気持ちを持って出席しました。講師のお話に出てくる聖書の言葉は、わたしの心をグサッと突き刺す鋭いものでした。人を憎み、人を裁き、悪には悪をもって報復する人間の自己中心性が「罪」なんだと言われた時は、まるで自分を言われているようでした。その先生のお話の中で、1つ不思議に心に深く残っているものがありました。

説教者

ピーターと呼ばれるアメリカ人のボランティア青年が、アフリカの難民キャンプで働いていました。彼のテントに一人の男の子がいましたが、外の世界に全く心を閉ざしたその子に、医者もさじを投げました。その時から、このピーターがその子を抱いて座るようになりました。彼は特別の許可を得て、昼も夜も抱き続けました。その子のほほをなで、接吻し、耳元で子守歌を歌い、2日2晩、ピーターは眠る間も惜しみ、全身を蚊に指されても動かず、その子を抱き続けたのです。3日目のことでした。ピーターの目を見て、その子が初めて笑ったのです！「自

分を愛してくれる人がいた。自分を大事に思ってくれる人がいた。自分はだれにとっても、どうでもいい存在ではなかった…。」ピーターは泣きました。喜びと感謝のあまりに。勇気づけられた彼は、泣きながらも、食べ物と薬をその子の口に持っていきましました。子供は食べました。絶望が希望に取って代わられたとき、子供は食べました。皆さん。「愛」こそ最上の薬なのです。食物なのです。

まゆみモノローグ わたしもこのこのように心を閉ざしていた。けど、わたしもイエス様に愛されているのかもしれない。もしそうだとしたら…。

ナレーション そんなわたしに、通っていた教会の牧師先生は次の聖書の言葉を教えてくださいました。

聖書朗読 あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に合わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。(I コリント10:13)

まゆみモノローグ わたしは今日まで憎しみの心を持ち、自分のことだけしか考えていなかった。今の今まで、イエス様はわたしをこんなに深く愛していてくださったことを知らなかった。試練とともに、わたしに備えられた脱出の道とは、イエス様ご自身なんだ。ああ主よ、感謝します。

ナレーション わたしは思わず喜びのあまり、涙とともに感謝の祈りをしていました。こうしてわたしは教会に導かれて3か月後にクリスチャンになりました。わたしも、ピーターに抱かれ続けたあの子のように、神の愛の懷の中で生きることを始めたのです。程なくわたしは、教会学校の先生の奉仕を始めました。

教会学校の生徒 横山先生、今日は分級に何するの？ 遊ぼうよ。

まゆみ まず聖書の勉強してからね。時間があったら外で遊ぼう。

生徒 いつもそう言うんだから。今日は初めから遊ぼう。いいだろ。

まゆみ ダメなものはダメ。

生徒 何だ、先生のブス！

まゆみ 何よ！ やっつけちゃうぞ。先生強いんだから。

ナレーション 不慣れではありましたが、子供好きなこともあり、小さいみんなと一緒に聖書を学ぶことは喜びでした。母もわたしと一緒に熱心に教会に通うようになり、木曜日の聖書の勉強会にも欠かさず出席しました。こうして、突然の病に挫折したわたしの心に傷はいえて、明るい日々が訪れたかに見えました。でもわたしの行く手には、更に大きな試練が待っていたのです。

母 先生、この勉強会が楽しみです。先生や皆さんと一緒に聖書を読んでお話しながら学ぶと、聖書のことがよく分かるんです。独りで読むと、つい以前の宗教の教えとごちゃ混ぜになってしまっ。

牧師 お母さん、よかったですね。じゃ今日はここまでにしませう。だんだん寒くなって来ま

すので、日々健康も守られるように祈りましょう。

ナレーション こうして母が、学び会を終えて帰ってきた翌日のことでした。夜、仕事から帰ったわたしを出迎えて、しばらく話してから床に就いた母は、間もなく突然胸の苦しみを訴え始めました。

母 (苦しそうになる。)

まゆみ お、お母さん、お母さん！ しっかりして！

ナレーション わたしは慌てて母を抱き抱えましたが、医師への連絡も間に合わず、病院に着いた時には、すでに母は息絶えていました。それからしばらくの間、まるで悪夢を見ているように、わたしはぼう然としていました。そんなわたしを牧師夫人が抱き抱えるようにして言われました。

牧師夫人 まゆみさん。ここでしっかりとお母さんを天国に送りましょう。お母さんは、確かな信仰を持って、天国の希望を持って神様のもとに召されたのよ。あなたもお母さんの信仰をしっかり受け継ぐのよ。

ナレーション あまりにも突然な母の死。悲しみのうちにも天国への望に満ちた告別式。一折節に母を思っては、わたしの胸は涙で詰まりました。でもそんな中にあっても、以前にはなかった心の平安が、常にわたしの中にありました。「脱出の道」であるイエス様が、いつも共にいてくださるからでしょう。もう母はこの世にはいませんが、こうしてわたしとイエス様との新しい生活が始まりました。

教会青年会員A まゆみさん。今年のクリスマスは青年会で劇をやったらどうかな。主役をさせてあげるから。

まゆみ まあ。主役はともかく劇は賛成よ。だれがシナリオ書くの？

青年会員B 簡単なのを僕が書くよ。題は「これからのまゆみの歩み」というんだ。

まゆみ 何よそれ。変なの作らないでね。まだ結婚前なんだから。

青年会員B 任せてくださいよ、ボス。

まゆみ あ、そのボスだけはやめてくれる？ 知らない人が聞いたら変に思うじゃない。

青年会員B はいはい、分かりましたよ、ボス。

一同 (笑い)

ナレーション クリスマスも近づいたそんなある日の礼拝後、牧師先生が、礼拝に初めて出席した青年の方を皆さんに紹介しました。

牧師 今日、私どもの礼拝に初めて出席くださった石堂先生です。先生は北海道の教会に赴任される予定ですが、その前にいろいろな教会の礼拝に出席したいとのことで、今日は私どもの礼拝に出席されました。よいお交わりをお持ちください。

石堂牧師 突然ですが、礼拝に出席させていただきました。主にあるお交わりを頂きたいと思っております。よろしく願いいたします。

ナレーション この石堂先生と、やがてわたしが結婚することになるなんて、だれが想像したでしょうか。そのお話があった時、こんな至らない者が牧師と結婚することはとても勇気が

要りましたが、神様に支えられ、祈りのうちに決断できました。こうしてわたしは牧師夫人としての新しい生活を始めるため、北海道の釧路に出発しました。母教会の青年会の皆さんの祝福とせん望の声を背に聞きながら…。

牧師夫人(手紙) まゆみさん、お元気ですか？ 初めての北海道の冬、いかがですか？ その寒さに負けない温かい家庭、温かい教会の交わりを育ててください。私たちも、をのために祈っています。

ナレーション 母教会の牧師夫人の手紙です。わたしは今、多くの人々の祈りに支えられ、尊敬できるよき夫を得て、神様の備えてくださった道をまっすぐに歩んでいます。右にも左にもそれないようにー。

(完)